

るをや、此の珠と祖師既に申して居ればそれ以上註す必要はなしとす、御義口伝に云く南無妙法蓮華経は方便、方便は八識已下也、妙法蓮華経は九識也。と、拙劣な見解は迷を生ぜしむ、又大公周公が成王を……の成王は文王とあるを成王と伝唱するが如き誤り、真諦文に成王幼稚の眷属と既に示されたり、西山本門寺蔵の和漢王代記に

第一文王――

第二武王――周公旦（武王ノ弟）

第三成王――

呂尚ノ弟子也。

とありこの周公旦は軍学者太公望（学名呂尚）の弟子又特にくはしくは朝師見聞を良く御覧あり度。愚生若輩浅学の身をも顧りみづ研究の一端として申し述べました次第であります。

昭和三一、九、一四 清水竜ヶ寺にて記之。

染浄二性に就て

熊 王 海 潮

人間には浄なる性分と染なる性分の二つの、性分が有つて、何人と雖も其一つをさえ捨てたる事は出来ない。

釈尊と雖もそれは捨てたる事は出来ない。と是を惟ふに人間の運命は之等相反する性分の上に立つてゐるものと考へられる。

浄性とは仏性の事唯識に従へば九識真如の要求であり、染性とは五根の要求即ち五欲と、過去の行業に薰習せる八識に依つて起る性分で其為一般には染性の方が、強く働くから其二性の中心を外れる場合が多い。

是等二性の矛盾する事に依つて人間の運命は展開されて行くものだ。

そうして人間の運命が之等二性の中間を走つてゐる時其人は善であり、幸福でも健康でもあるのだ。

別して性悪とか性善とは善心とか悪心とかあるわけでない。

其二性の中間を外れる程度、欲求に従つて、悪ともなり不幸ともなり、病ともなる。人間でも犬猫、草木に至るまでが病にかゝったり、傷を受けたりした場合、それは極めて自然に自ら之を治そうとする性質がある。

それは此二性の中心を外れた運命を復中心に戻そうとするからである。

併し其外れる程度が過ぎると生きて行かなくなる。若しそうでないとすれば医者にかゝれば病は必ず癒らな

ければならない。

廻が医者にかゝつても良い薬を飲むでも治らないものがある。それは自ら癒らうとする性分が強くなかったからで換言すれば人間の運命が此二性の中心に戻れなかったからである。

医師が病人を診察して薬を盛る事も、患者の脉に於ける自然の秩序―仏の法則を調べ薬を与えたりして其秩序（仏の法則―法華經）に従はせ其人の運命を其二性の中間に在らしめんとする事即ち自ら癒らうとする心を増長せしむるのである。

之は丁度宗教家が人々に信仰を勧めて一般に強からんとする欲望を制して二性の中間を行かしめ様とするに当る。法華經普賢品に少欲知足にして能く普賢の行を修し法華經を保つ者は諸の魔を破すと、

兎角強からんとする五欲の煩惱を制し法華經（自然の秩序―仏の法則を得て二性の中間を行けば諸の魔―病魔も便得さらしめんの義

次の四法を成就せば此經を得て諸の魔を破すと、一には仏に護念せられ、二には諸の徳本を植え。三には禪の功徳を積み。四には一切衆生を救ふ心を發す。

是等四法は唱題一行に依つて成就される。

唱題一行に依つて自然に円の三学が成される。即ち戒定慧の三学戒律を行じ進んでは徳本を植える。定は禪の功徳を積み。慧は本尊を知る智慧となる。本尊を知れば一切衆生を救ふ心を發す。斯る行の人は仏に護念せらる斯して三学に依て四法は成就せらる。一服の薬に幾種かの薬分を含む様に一遍の御題目には斯る功徳あり。

行が成就せば悪も不幸も病も一旦外れた染淨二性の中間に戻り、善ともなり幸福ともなり健康ともなり得よう。

医者は物の上より脉の方から宗教家は心の上より染淨二性の中間を行かしめ様とする。

御題目修行に依つて病が癒えてもそれは迷信でもなければ不思議でもない。此等二性の中間を保持出来るからである。

不受不施者の潜伏

宮 崎 英 修

不受不施者の潜伏は寛文五、六年（一六六五―一六六六）の禁止によつて不受不施派教団が成立した時に始まる。そし